

	<p><b>オピニオン</b></p> <p><b>劇映画「渡されたバトン」を観て</b></p> <p><b>環境企画 松村 眞</b></p>	<p>0-12</p> <p>発行日</p> <p>2013. 4. 8</p>
---	---	--

福島第1原子力発電所の事故から2年が経過したが、放射能が残る地域から避難した人たちは、まだ住み慣れた町に戻れない。家族が仲よく暮らしてきた家も、何代にもわたって耕し続けてきた畑も、人気のないまま放置されている。なぜこんな目に会わなければならなかったのか、こんな理不尽なことがあるのか、というのが被災者の率直な怒りであろう。復旧の見通しが不透明な現状も大きな不満に違いない。私もこれまでは原子力発電の安全性に大きな疑問を持っていなかった。スリーマイルアイランドの事故は知っていたが、原因はめったにない操作ミスで、被害は限定的と思っていた。チェルノブイリの事故では子供の甲状腺障害が多発し、長期にわたる住民の避難も必要になった。だが、旧式の原子炉が原因で日本にはないと聞いていた。それに遠い国で起きたことで、日本でも起こり得る身近な問題とは思っていなかった。

ところが福島の事故で、日本の原発も安全ではなかったことが明白になった。このため、今後も原子力発電を続けるべきかどうか不安に思っている。私はエンジニアなので、技術的な課題は解決できるのではないかと思っている。それに原子力発電がなければ、電力需要の約3割を供給できなくなるではないか。火力発電に代えれば温室効果ガスの増加を避けられないし、LNGの輸入を増やせば貿易赤字が大幅に拡大するだろう。太陽光発電や風力発電は、どう頑張っても電力需要の1割も供給できない。節電の余地はあると思うが、家庭だけでなく産業需要も含めた3割もの節電は容易ではない。脱原発の理念はわかるが、現実的な姿が見えないではないか。

このように原発に対する態度が優柔不断なまま、私はこの映画を見た。率直な感想として、この映画は小さな町の住民運動を通して、原発の問題と民主主義のあり方を問いかけていると思う。特定の主張を代弁するのではなく、見た人に「それぞれが考えて欲しい」と訴えているように思えた。娯楽映画とはいえないから、こんな映画は商業ベースでは決して作れないだろう。それだけに、この映画の製作費を負担した方々に心からお礼を申し上げておく。さて、この映画の主題はいくつかあると思うので、少し順を追って感想を述べる。

映画の冒頭で、原発の予定地になった人口約3万人の町がでてくる。日本海に面した新潟県の巻町で、漁業と農業が中心の町は過疎化が進んでいる。この町で用途不明の用地買収が進み、事情を知らない町民が不安に思うのだが、後で原子力発電所の立地計画が発表される。ここで私が残念に思うのは、なぜ計画を公表せずに用地買収を進めたのかという理由である。おそら

く計画推進側は、公表すれば反対運動が起こり、用地買収が困難になることを恐れたのであろう。きちんと説明しても、どうせ反対派が生まれて抵抗するという、地域住民への不信感があったと思う。身近な清掃工場や葬祭場の計画でも、どんなに施設の必要性を丁寧に説明し、環境に十分配慮しても反対運動が起きているからだ。地域住民側にも、計画推進側が都合の悪いことを隠しているのではないか、地元の意向を聞かずに強行しようとしているのではないか、という不信感がある。この映画では相互の不信感の上に、原発自体の安全性に関する不信感も合意形成を困難にしている。

開発推進側の地域住民に対する不信感、地域住民の開発側への不信感、原発の安全性に関する不信感、日本にとって必要以上の軋轢を生み、いたずらに時間を空費し、費用の増大を招いていると私は思っている。ではどうすれば改善できるのだろうか。ずっと以前だが、民主主義の熟度について読んだことがある。第1水準は計画を地域住民に知らせる必要はないとするレベルで、第2水準は計画を地域住民に知らせるが、意見を聞く必要はないとするレベルである。第3水準は計画を地域住民に知らせて意見を求めるが、その意見を計画に反映させるかどうかは開発側の裁量とするレベルである。第4水準は、計画を地域住民に知らせて合意形成の努力をするが、一定の努力で合意が得られなければ開発を推進するというレベルである。第5水準は、計画を地域住民に知らせて合意形成の努力をし、合意が得られなければ開発を止めるというレベルである。この五つの水準が民主主義の熟度を示す指標と書いてあったのを思い出した。さて日本はどの水準だろうか。少しずつ水準が上がってきたのは確かである。だが新幹線やダムの記事は、まだ第3水準か第4水準が多いのではないだろうか。広範な地域に社会的な利益をもたらす施設は、立地地区の住民だけに適否の判断を委ねるわけにはいかない。しかし地域住民の不信感を解消するには、広範な地域の利害関係者も含めて合意形成の努力をし、それでも合意が得られない場合は計画を中止する第5水準が必要であろう。

一方、地域住民側も熟度を高める必要があると思う。きちんと説明を聞いて必要なら勉強もし、情緒に流されずに、社会的な利益を冷静に判断する必要があるのだ。地域エゴや利権、金銭的な利害で判断するような水準だと、開発側の不信感もなくなるであろう。幸いなことに地域住民の熟度も年々向上していると思う。従来は不信感の原因に開発側との情報格差があった。だが今はインターネットによる情報アクセスが容易になったので、参考情報の収集や第三者の見解を得やすくなった。IT技術の恩恵である。

他方、原発の安全性に関する不信感、福島事故で最悪の事態を露呈した。これまでの信頼感に地に墮ちたといっても過言ではない。マスメディアに現れた当事者は、他人事のような解説に終始して、自らの責任を容易に認めようとしなかった。当事者だけでなく、長時間の電源喪失を想定外とした安全委員会や監督官庁の責任者は、江戸時代なら「私財没収のうえ切腹」

に該当するのではないか。だが今もなお、誰も被害者が納得できるような責任を取っていない。安全神話の片棒を担いできた専門家達は、本当に責任を感じているのであろうか。私は原発への信頼感を回復するには、二つの改革が必要と思っている。一つは当事者・監督官庁・学者の責任意識の向上である。誤った判断をした責任だけではない。無作為の責任も、結果責任も負う立場にあるのだ。責任意識を高めるには、その前に責任の所在を明確にしておく必要があると思う。誰にどういう責任があるのか文書化されていたのだろうか。もう一つの改革は、客観的な説明能力と説明責任意識の向上である。福島の事故では、テレビに日替わりのような解説者が登場したが、視聴者にわかる説明ができていたとは思えない。一般市民に説明するのだから、必ずしも専門家である必要はないと思う。もちろん一定水準の専門知識は必要だが、それよりも説明能力の方が重要なのだ。いっそのこと、池上彰さんにでも依頼した方がよかったのかもしれない。説明能力と同時に必要なのは、「相手がわかるように説明する責任がある」という説明責任意識である。十分に説明しただけでは責任を果たしたことになる。十分にわかってもらえて初めて説明責任を果たしたことになるのだ。現場に近い技術者には、説明能力と説明責任意識の向上が必要ではないか。

さて、ここで映画の感想に戻ろう。原発の立地予定が公開された町は、賛成と反対に意見が割れる。残念に思うのは、反対派は理由に原発の危険性を挙げるが、観念的で根拠が希薄なことにある。安全性に関する十分な情報が提供されていないからだが、よほど具体的に事故の確率と予想される損害を理解しないと、的確な判断ができないのではないか。このため、反対派は町の将来を真剣に考えているのだが、会合では十分な説得力を発揮できない。経験がないリスクということもあって、リアリティーを具体的に伝えられないのだ。一方、賛成派は開発側が立地を強く希望していることを知っている。だから本当は受け入れるつもりなのに、初めは反対して補償金を吊り上げるのが得策と考え、形式的には反対の看板を掲げる。

最も残念に思うのは、この機会になるべく多額の補償金を手に入れようとする発想にある。この映画が事実なら、適正な労働による報酬でも妥当な賠償金でもなく、不労所得を目的に意思決定しようとしたのであり、あまりにも次元の低い考えだと思う。もし地域住民にこのような発想があると、開発側の地域住民への不信感もなくなるであろう。「言葉では何と言おうと、本音は遊んで暮らせる金が欲しいだけだろう」と甘く見られ、正しい理解にもとづく合意形成から遠いところで決着することになるのだ。報酬は労働によって得るものであり、相手の弱みに付け込んで補償金を吊り上げようとする姿勢は、自分を貶めるものであろう。個人だけでなく、立地地域の行政機関まで金銭的な誘惑に惑わされると、長期的な視野にもとづく正しい判断を歪めてしまう可能性がある。「過疎に悩む地方だから、国からの補助金や補償金を当てにして何が悪い」という考えもあるかもしれない。しかし、あくまでも地域は地域なりに自

立・自存の道を追求すべきであって、補償金を当てにこの理念を軽視すると、その代償として誇りを失うことになるのだ。

映画の感想に戻ろう。地域のリーダーが町のためと称して賛成に回る一方、冷静に状況を見ていた若手が声を上げ始める。一時的な補償金にとらわれずに、原発は本当に必要なのか、町にとってよいことなのか、子供に伝え残してゆく価値があるのか、と問い始めて行動を開始する。親の世代と子供の世代の議論は、この映画の最大の焦点である。「生命は祖父母から両親に、子供から孫の世代に伝えるリレー」という言葉は、非常に説得力がある。そして「子供に伝えるバトンには好ましくないものをつけておきたくない」というセリフが、この映画製作者の真意を代弁していると思う。負の遺産を次の世代に伝えたくないという主張は、莫大な借金を次の世代に残そうとする国の政治にも課題を突き付けているのではないだろうか。

映画では、自分たちの生命の健全な継承が大切という主張が、賛否を超えて市民の共感を得る。その結果、紆余曲折を経て住民投票が実現し、原発の立地は否定された。原発立地の是非が住民投票に委ねられたのは日本で初めてであろう。でも私は結果よりも、住民投票が実現するまでの巻町の民主主義の実践の方に感動した。これまでは「国が決めたことだ」とか、「町のため」だからという理由で、思考停止に陥ることが多かったのではないか。この映画にはそうではなく、自分たちのために、子供たちのために、自分たちの意思で、自分たちの町と地域のことを決める民主主義の原点が描かれている。巻町はもう元の巻町ではない。原発立地に関する住民運動を経て、民主主義の第5水準に到達したのである。これまで主導権を握っていた町長や組合長ではなく、幅広い市民の町になったのだ。この町はもう戻ることはないだろう。この映画が多くの都市で上映され、民主主義の原点が広く伝えられることを期待している。

(終わり)

(備考)

この映画は、新潟県の巻町（現：新潟市西蒲区）で、原発建設をめぐり20年以上も繰り広げられた住民運動をベースにしています。現地では住民投票が実現し、原発建設計画が阻止されました。映画製作には多くの個人が出資し、全国の団体が制作に協力しました。一般的な映画製作会社の作品ではないので、全国一斉のロードショーではなく、XXX文化会館でXX日に上映といった自主上映スタイルで公開されています。私は出資者からの案内でこの映画を知り、横浜の関内ホールで観賞しました。詳細は下記のHPをご参照ください

<http://www.cinema-indies.co.jp/aozora3/schedule.php>